

# Maslow の Blackfoot 調査に関する一考察

——「基本的欲求」と「シナジー」の概念的基礎——

三島 斉紀

## 1 はじめに

心理学者 Abraham H. Maslow (1908–70) の学説は、1943年論文「人間動機の理論」(Maslow, 1943 b)<sup>1)</sup>の中で提示された、「基本的欲求 (basic needs)」、「欲求階層 (needs hierarchy)」、および「自己実現 (self-actualization)」などの概念でよく知られている。しかし、これにとどまらず、彼の主張の核心は、「B 価値 (Being-Values)」、「シナジー (Synergy)」、「至高経験 (Peak Experiences)」、「メタ動機 (Metamotivation)」、および「Z 理論 (Theory Z)」などの概念に基づいた「人間性心理学 (Humanistic Psychology)」の提唱にあった。したがって、Maslow 心理学説を体系的に把握するためには、前群のみならず後群の諸概念に関する理解が求められる。

この小論では、特に、前群のうち「基本的欲求」と後群のうち「シナジー」に関連するものとして、Maslow が1938年に行った「Blackfoot 調査」について考察する。同調査の報告では、当時の H. A. Murray (1893–1988) などの個人心理学とは異なり、Maslow が人間の欲求を普遍的なレベルで捉えることの理由が示され、また、彼の主張した人間性心理学の主要概念である「シナジー」の基礎的状况が示されているからである。

これまでの Maslow 学説の研究において、この「Blackfoot 調査」が殆ど取り上げられることがなかったのは、おそらく当該調査に関する資料・文献等が公開されていなかったためと思われる。しかし、このほど、オハイオ州のアクロン大学図書館に所蔵されている当該資料、すなわち、1938年作成(表紙頁の手書き箇所より推定)のタイプ書き草稿：“The Psychology of Northern Blackfoot Indians” (Maslow の単著) および1945年作成(最終頁の手書き箇所より推定)の草稿：“Northern Blackfoot Culture and Personality” (John J. Honigsmann との共著) の2つを入手することができた。

そこで、以下では、1938年夏の Blackfoot 調査に至るまでの経緯をふまえたうえで、同調査から Maslow はいかなる知見を得たかを考察する。

1) この1943論文は著書 Maslow (1954) の第5章に収録されたが、当該著書・第2版(1970)では第4章として収められている。このように初版と第2版とでは章の配列や記述に若干の差異があるので、引用や参照に際しては注意が必要である。

## 2 Blackfoot 調査の報告書（1938年草稿）

ニューヨークに生まれ育った Maslow は、ウィスコンシン大学の Harry F. Harlow（1905-81）教授の指導のもと、サル性欲や支配欲などに関する研究で、1934年博士号を取得する。翌年から1936年、Edward L. Thorndike（1874-1949）教授の招きによりコロンビア大学の特別研究員となり、1937年からはブルックリン大学の専任教員となる。彼は研究対象をサルからヒトへと移し、所属大学の女子学生らを主な被験者にしながら、彼らの支配感（dominance feeling）や自尊心（self-esteem）および安心感（ego-security）に関する計量的な研究を始めていた。

その頃、Maslow はコロンビア大学で教えていた文化人類学者 Ruth F. Benedict（1887-1948）と知り合い、彼女の講義に参加する機会を得る。Benedict は文化人類学と心理学とを結合させた統合形態論的アプローチ（Configuralist Approach）の文化・パーソナリティ学派（Culture and Personality School）に属し、「今日の社会的考察にあたり、最も重要な課題は文化の相対性（cultural relativity）を適切に考慮することである」（Benedict, 1934: 278）として、文化相対主義を唱えていた。Maslow もそのような Benedict の研究姿勢に共感し、自身の考案したパーソナリティ検査法をアメリカ社会とは異なる文化においても適用したく考えていた。そこで、インディアン文化に詳しい Benedict から、カナダ・アルバータ地方に居住する Blackfoot Indians の調査研究を勧められ、社会科学研究評議会（The Social Science Research Council）からの資金援助を得て、1938年夏、他の2人の研究者（Jane Richardson, Lucien Hanks, Jr.）と共にフィールド調査を行った<sup>2)</sup>。

そこで、まず、当該調査の直後に作成されたと思われる報告草稿「北方ブラックフット・インディアンの心理学的研究」（Maslow の単著）の内容からみることにしよう。7頁に満たない短い草稿で、Maslow は調査の目的と結果を述べている。その要点を列記すれば、次のようである（以下、Northern Blackfoot Indians を「Blackfoot 族」と略記）。

- (1) 文化とパーソナリティとの相関についての比較研究であること。
- (2) 単なる民俗学的な研究ではなく、通文化（文化横断）的な比較（cross-cultural comparisons）を可能にするデータ収集を行ったこと。
- (3) Blackfoot 族では自尊心や支配感の有様について、アメリカ社会と比べ、権力欲に基づくものがかなり少ないこと。それゆえ、自尊心や支配感に関し、両文化は不連続的と考えられること。
- (4) 他方、安心感は、ニューヨークと同じ尺度で測定可能で両文化間には連続性が認められるところから、安心感は通文化的な概念と考えられること。
- (5) Blackfoot 族の約70～80%は、最高度の安心感を示すアメリカ社会の5%よりも、一層高度の安心感をもつという文化類型の相違は、Benedict の主張を裏付けるものであること。また、Blackfoot 族が大変寛大な人々から成り立つという事実を示す文化人類学は心理学の発展に貢献し、また心理学における発展は文化人類学の進展にも寄与するであろうこと。
- (6) Blackfoot 族では不安感を示す人々は数少ないものの、その症状はアメリカ社会の人々と同じ類型にあること。
- (7) このことから、複数の社会は特定の文化によって特殊化ないし相対化され得るとしても、通文

---

2) Hoffman（1988: 114-116）を参照。

化的な研究やそれに基づく一般化の広い枠組みによって考察される必要があること。

- (8) Blackfoot 族でのパーソナリティの様相はアメリカ社会でのそれとは明確に異なるとはいえ、パーソナリティ各側面の分布状況はほぼ同じ (almost the same range in whatever aspect of personality) であること。
- (9) このようなことから、人間を社会の文化的圧力で形づくられる木偶の坊 (a mere lump of clay) とみなす極端な文化相対主義 (any extreme form of cultural relativity) の考え方は支持できないこと。
- (10) したがって、心理学は、人間の方が社会へ持ち込み、当該社会の構築・抑圧・再形成の基礎的データとなるような、「特定類型のパーソナリティを持つとする基本的ないし自然的な性向 (fundamental or natural “tendency-to-have-a-certain-type-of personality”)」とはいかなるものかを考究すべきこと。

これらから分かるように、1938年草稿の主眼点は、極端な文化相対主義に対する懐疑と、心理学のあるべき研究視角の提示にあった。

Maslow は、1937年の“Personality and Patterns of Culture”という論考のなかで、これからの心理学はこれまでの個人心理学を脱して、文化人類学の教えるパーソナリティへの所属社会の文化的影響を重視する研究を行うべきことを強調すると共に、「われわれ心理学者は、まず個人を、特定文化集団の一員として扱い、その後、人類一般の一員として扱うことを試みることができる」(Maslow, 1937: 409) と述べているように、個人のパーソナリティを、文化相対主義にとどまることなく人類普遍的な視点から捉える必要性を指摘した。このように文化相対主義を超えようとする研究指向は、1933年9月、ドイツのナチス政権から逃れてニューヨークの新社会研究院(New School for Social Research) 教授となったゲシュタルト心理学の創始者 Max Wertheimer (1880-1943) が、表層的な文化相対主義の在り方を批判した1935年論文: “Some Problems in the Theory of Ethics” に影響されたとの見解を、Maslow 研究家の Edward Hoffman は示している (Hoffman, 1988: 94; Henle, 1961: 29-41)。

次に、そのような1943年論文の後に作成された1945年のものと思われる41頁に及ぶ調査報告の草稿「北方ブラックフット族の文化とパーソナリティ」(John J. Honigmann との共著; 脚注で「Northern Blackfoot」と略記) をみることにしよう。そこでは、パーソナリティ研究の普遍的視角だけでなく、後年の「シナジー」概念の基礎となる Blackfoot 族の社会的状況が詳しく述べられている。

### 3 Blackfoot 調査の報告書 (1945年草稿)

1945年草稿の冒頭部で、Maslow はパーソナリティ研究に関する自身の立場を説明する。すなわち、従来の研究が「パーソナリティの因果的・分析的・原子論的な理論 (the causal, analytic, atomistic theory of personality)」を指向していたことに対し<sup>3)</sup>、彼の症候群理論 (the syndrome theory of personality) は、パーソナリティを「行動や感情に関する症候群の組織化されたもの (an organization of syndromes of behaviors and feelings)」として捉えようとした<sup>4)</sup>。

例えば、安心感の満たされていると思われる人を観察すると、「人との結合感や人から愛されてい

3) Northern Blackfoot, p.4.

4) Northern Blackfoot, p.5.

るという感覚を持ち、世界を温かくて行い易い場所と考え、何か良いことが起きると期待し、平穏さ・心地よさ・リラックスの感覚を有し、人々を支配したいという権力欲よりも問題の解決能力への願望、アドラー主義者のいう『社会的関心』、協同性、親切さ、他者への関心、同情心<sup>5)</sup>などを内在させており、これら症候群は「相互に関係または関連し合う諸部分からなる1つのシステム(a system of interrelated or correlated parts)」<sup>6)</sup>として認識される。

しかし、それら安心感症候群の構成要素が変化させられるような状況、例えば、それらの充足が危機に曝されるようになると、その人の環境に対する見方が新たに形成され始め、その人のパーソナリティは変容して行動に変化が生じる。すなわち、複数の要素から構成される安心感症候群がどの程度に満たされるかによって、安心感に多様なレベルが存在し、それは数値によって検定できるものとした<sup>7)</sup>。

Maslow は支配感・自尊心レベル症候群に関する検定法をも考案していた。この症候群は安心感と同じく、「その人が持っている資産、名声、強さ、価値、身体」等の複数の要素から構成され<sup>8)</sup>、その評価いかんによって、その人の態度や行動が表出する。それゆえ、自尊心や自我レベルの症候群の充足度が変化すれば、その人のパーソナリティもそれに応じて変化する。十分満たされるときは、「自信、外向性、高い支配感、非伝統的なものを好む傾向、自己に対する信頼、独立心、猛々しいこと、荒っぽさ、冒険や新しい経験を欲すること」などの特徴が表出する<sup>9)</sup>。そして、比較的正常人々(relatively normal persons)の症候群レベルの変化はパーソナリティ全体に反映されるが、他方、精神的に異常もしくは神経症的な人々の場合では、ある症候群のレベルは高いが他のレベルは低いというように、部分的・断片的に変化する<sup>10)</sup>。例えば、自尊心症候群の数値が同程度に高い2人がいたとしても、安心感の満たされている人はそれに沿った全体的な行動が観察され、他方、安心感が満たされずに高い自尊心を有している人の場合は、ある部分の数値が突出して高く、ある部分が極端に低く表出する。

Maslow は、これら「安心感」症候群および「支配感(dominance feeling)・自尊心(self-esteem)」症候群を計測するテストを、Blackfoot 族に対しても試みることによって、当該パーソナリティ検定法が通文化的な妥当性を有するかどうかを調べようとした。

更に、Maslow は、外に表出する実際の態度や行動の深層には、その基礎となる価値観等のあることを指摘する。すなわち、パーソナリティを、①「関心や見解という意識レベル(conscious level)」、②「条件づけられた情動的態度や価値観という無意識レベル(unconscious level)」、③「安心感や自尊心症候群が応答する情動的欲求という中部動原体レベル(a deeper metacentric level of emotional needs)」の3つに区分し、特にパーソナリティの深層を形成する「隠れた文化(covert culture)」ないし「情動的欲求」への接近に留意する<sup>11)</sup>。

さて、このような研究方法をもって、1938年夏のBlackfoot 調査は、コロンビア大学で博士号を取得したJane Richardson と、同大学に在籍した後にイリノイ大学の教員となっていたLucien M. Hanks, Jr. との3人で行われた。Blackfoot 族の居住地は4つあるが、調査対象は、そのうち最北の

5) Northern Blackfoot, p.6.

6) Northern Blackfoot, p.5.

7) Northern Blackfoot, p.5.

8) Northern Blackfoot, p.6.

9) Northern Blackfoot, p.6.

10) Northern Blackfoot, p.5.

11) Northern Blackfoot, p.12.

居留地にいる人口約800人の Northern Blackfoot Indians であった<sup>12)</sup>。その居留地は、カナダ太平洋鉄道とボウ川の間に位置した長さ40マイル、幅5マイルのエリアに位置し、2つの白人の村（グレイチェン村：人口400人、クリュニー村：人口100人）に隣接していた。60マイルほど離れたところにはカルガリー市（人口5万人）がある。同居居留地は一部が平野、一部がゆるやかな起伏のあるプレーリーで、土地は農地として配分され、そこからは小麦とカラス麦が十分収穫できた。男たちは農業よりも家畜の群れを増やすことに関心があり、自分たちのことをカウボーイと名乗るほどであった。

同居居留地は経済的にみて特殊な状況にあった。カナダ政府からの指導で小麦を収穫していた土地の半分が売却されたが、その利益の大半はカナダ政府によって管理されている。これはバンド・ファンドと名付けられ、そこからの収入は年約12万ドルで、居留地を改良するために用いられている。そして、これは Northern Blackfoot 族をカナダの居留地のインディアン部族の中で唯一自立させ、同部族の人々に経済的・社会的な安心感を抱かせる基盤となっていた。このファンドから、毎週、牛肉、小麦粉、お茶が女性や子供に配給され、老人や農業を始める人々には特別の手当がなされていた。この配給は、慈善行為というよりも「良い投資からの収入」とみなされているところから、同部族の「自尊心を高める」ことに寄与している<sup>13)</sup>。

とはいえ、部族の人々はそれぞれ安定した現金収入を得るため、自ら仕事をしなければならなかった。馬や牛のほか、個人農園の農産物を販売していた。ただし、自立して農業をやるのに十分なほどの土地を保有する者は少なく、結果として、居留地の炭坑や道路工事に従事したり、干し草を作ったり、また不定期的な仕事を請け負っていた。このように現金収入は限られ、しかも現金の殆どは個人に直接的に与えられずに、居留地事務所で勘定・帳簿付けされていた。お金の必要な人はそこに出向いて、何々が必要であることを言わなくてはならなかった。また、ビジネス行為はいかなるものでも、カナダ政府からの許可は得られない状態であった<sup>14)</sup>。

教育は無料で、7歳から17歳までが義務教育となっていた。白人の学校へ行くことは事実上禁じられおり、2つのキリスト教系の寄宿舎学校のいずれかを選択し、男子には農業訓練、女子には家庭科教育が施されていた。子供たちは学校に行く頃までは Blackfoot 族の言葉を話すが、学校に入ってから英語を話すように強要される（学校で Blackfoot 族の言葉を使うとペナルティが課せられる）。にもかかわらず、年配者たちは部族の言葉しか話さない。彼らのうちの殆どが、若い時に学校での教育を受けてはいたが、英語は上手く喋れないという有様であった<sup>15)</sup>。

日常生活は、従前と比べると、徐々に変化し、彼らは白人文化の進んだ技術や装置に対し大きな賛辞を示していた。彼らは自動車やラジオを欲しがり、衣服も白人が着るようなものになっていた。しかし、パーティー、ダンス、宗教的な儀式、お祭り等の行事の際は、昔ながらの服装をしていた。通例、大部分の人たちは鹿革のなめし靴を履き、女性は老いも若きも伝統的な方法で髪を編み真中から分けていた<sup>16)</sup>。

Blackfoot 族では、処女や結婚における貞節さが重視されていた。太陽の踊りの儀式の際には処女が必要とされているが、その実態は理想とは全くかけ離れていた。子供たちの多くは、12～14歳頃から婚前交渉を行い、かなりの数の不貞、離別、再婚、離婚が見られ、結果として非嫡出子の割合はか

12) この最北（カナダ・アルバータ地方）の保留地に居住する Blackfoot Indians は、アメリカの Blackfoot Indians との間に血縁関係はない。

13) Northern Blackfoot, p.8.

14) Northern Blackfoot, p.8.

15) Northern Blackfoot, p.9.

16) Northern Blackfoot, p.10.

なり高い状況にあった<sup>17)</sup>。

Maslow はこのような Blackfoot 族の社会的特質について詳しく項目別に記している。その概要 (Sexual Behavior と Religion の項は除く) を、次に示そう。

(1) 《対人関係 (Interpersonal Relations)》<sup>18)</sup>—部族の人々は、よそ者に対して大変親切で、自動車 が故障した時やテントを建てる際に、報酬を求めずに手助けをしてくれた。また、部族の 1 人で通訳 を務めていた Teddy Yellowfly が、「馬を集めて、焼印、去勢、予防接種を、明日行くと何気なく話 していたところ、作業の当日、6～7 人の若者たちが彼を助けるべく待ち受けていた。しかも、彼ら は報酬を求めなかった」のである。「そうしたことは、強制や世間の考えからではなく、自発的に生 じているように思われ (They seem to arise spontaneously rather than from a sense of compulsion or public opinion.)」、それゆえ、「今日の北方 Blackfoot 族社会の在り方は協同主義でも個人主義でも ない (The Northern Blackfoot of today can be categorized as neither cooperative nor individualistic.)。… (中略) …そこでは個人の願望、目的、野望、好み、特異性を重んじる感覚があると同時に、助け合うこと (helpfulness) があちらこちらで見られる」とされる。

(2) 《子供たちとの関係 (Relations with Children)》<sup>19)</sup>—この部族では、温かで個人的な結びつき が子供たちと他のメンバーとの間で見られ、このよう結びつきは血縁とは無関係である。あたかも部 族の皆が互いに家族であるかのような関係は、子供を援助し庇護するものとして機能しているところ から、各々の子供は「自分たちが部族全体の人々から必要とされ、愛されていること (he is wanted and loved by every person in the whole tribe.) がよく分かっている」とされ、私生児や継子が異な った処遇を受けることもない。

子供が何かを欲しがるとき、周りに親がいなければ、すぐ側にいる人々がそれを与えていた。ま た、毎年恒例の「太陽の踊り (the Sun Dance)」の際には、景品 (the big giveaways) として地域 の子供たちすべてにコーラ飲料とアメ玉が配られるが、父母たちは自分たちへの贈り物以上に子供た ちへの贈り物に感謝している。このように Blackfoot 族では、「寛大さ (permissiveness) が子供に対 する基本方針 (the keynote of attitudes toward children)」となっており、子供たちが欲するものは 何でも与えられ、日常生活のあらゆる点 (服装や教育など) でも子供たちの自主性が尊重されてい る。居留地周辺の白人たちは、Blackfoot 族は子供を甘やかし過ぎてしていると非難するものの、興味深 いことに、白人たちは自分らの子供たちよりも彼らの子供の方が行儀の良いことを認めている。Blackfoot 族の子供たちは、大人の嫌がることや望むことをしっかり弁えながら育てられているのである。

(3) 《友情 (friendships)》<sup>20)</sup>—Blackfoot 族の人々は、誰しもが自らの居留地や別の部族の居留地に おいて、助けを頼める親族や友人を多くもっている。親族や友人たちが頻繁に訪ね合い、家に泊まっ て一緒に夜を過ごすことも多い。特に、同じ年齢者の間で結ばれる小集団において強固な友情関係が 見られる。この 10～12 人の集団は「ニタカ (nitaka: 同年齢の友人)」と呼ばれ、その中で最も親密 な関係の 2～3 人は「ニタコミマ (nitakomima: 最愛なる友人)」と言われる。「彼らは同じことを 行い、同時に社会の一員となり、そして、いつも一緒にいて」、そこには完璧なまでの相互信頼や忠 誠心ならびに愛情が見られ、金銭も殆ど共有の状態である。

17) Northern Blackfoot, p.26.

18) Northern Blackfoot, pp.12-13.

19) Northern Blackfoot, pp.13-15.

20) Northern Blackfoot, pp.15-16.

(4) 《敵意 (Hostility)》<sup>21)</sup>—敵意や攻撃性は、外面的にも内面的にも殆ど見受けられない。「この部族は温かく、友好的な集団である」とされる。ただし、「皮肉 (criticism)」を言い合うことがよく見られるが、陰でそこそするような悪意はない。皮肉は「現実的で正当なもの (realistic and justified)」、すなわち皮肉を通じて対象者の改善が意図されている。うわさ話も皮肉と同様の効果が期待されているが、事実を偽ることは許されず、常に正直であることが求められている。

(5) 《冗談を言い合える関係 (Joking Relations)》<sup>22)</sup>—互いに冗談を言い合うことは、この部族の特徴でもある。ただし、ここでいう冗談とは、言う側だけでなく受け手側にも良い意味合いを含んだ笑いを誘うようなものである。部族内の仲は大変良いために、タブーは何もないかのようであり、性的な事柄についても、時にはジョークを交え、また時には真剣に議論されている。だからといって、彼らの間で肉体的な交渉は決して見られない。

冗談は、ユーモアを含んでいるゆえに、部内の分裂を引き起こしかねない潜在的な緊張や嫉妬ないし争いごとを防ぐ働きをしている。また、冗談を言うことは「良いもの、楽しいもの (good fun)」として受け止められている。なぜなら、皮肉と同様に、笑われる原因となる部分をその人が改善してくれるだろうとの願いが込められているからである。そのため、笑われる側は憤慨したりはせず、むしろ冗談を言われることは自分に対する賛辞であるかのようにみている。それゆえ、互にからかい合う間柄は、最良の友人関係とされる。

(6) 《競争 (Competition)》<sup>23)</sup>—Blackfoot 族における競争の目標は、「経済的・社会的な名声と地位」にある。族の長となる者はその地位に相当する責務を履行することによって、従となる者よりも特別の名声を得ようとする精神をもつとされる。この理由は何かと問うと、族長は、「私には貧しい人にも弱い人にも申し分のない援助をさしのべる用意のあることを皆がよく知っている」からと答え、自分の素晴らしさを自画自賛する。このように、族内での競争目標は、「名声を誇る (proud of their reputations)」ことにある。

この部族では、最も裕福な者 (=多くの馬を所有している者など) は、必ずしも尊敬の対象とはならない。富は他者よりも優位に立つための手段ではない。自分の財産を部族の人々のためにいかに使うかが、尊敬されるかどうかの要点となっている。したがって、アメリカ社会での蓄財のための蓄財というモチベーションは見られない。例えば、ロイヤル・カップルがカルガリーを訪問した際、前出の Teddy Yellowfly は、部族の何人かに彼らと握手する機会を設けたが、部族人のカルガリーでの宿泊費を自らのポケットマネーで支弁した。彼は、このような他者への支援が、自分が酋長であるということよりも、むしろ自分が裕福であるという事実によると認識している。彼にとって、その立場にいることは金のかかることであるが、「彼は心から部族の皆の福祉を気遣うがゆえに、酋長を任された (he became chief because he showed himself thoughtful of the people with their welfare at heart)」のである。このように、酋長の大部分はその立場を「負担付き義務 (onerous obligation)」と見ており、権力と名声は尊敬をもたらすと同時に、様々な義務を果たす「寛大さ (generosity)」が求められている。

なお、競争については、ゲームやスポーツという形でも存在しているが、そこには運の善し悪しという観念はない。負けるということは、技能や技術に欠けているためと考えられている。もちろん、負けることは誰も望まないのも、負けた人は落胆の様子を見せる。若い人も中年男性も運動競技を行

21) Northern Blackfoot, pp.16-17.

22) Northern Blackfoot, pp.18-19.

23) Northern Blackfoot, pp.19-21.

うが、競争が潜在的に有する脅しや敵意というものは見られない。

(7) 《Blackfoot 族のパーソナリティ (Blackfoot Personality)》<sup>24)</sup>—上でみてきたパーソナリティを支える文化的パターンはどのようなであろうか。まず、彼らは子供の頃から「自分と部族の他の人々との間に、温かい情動的な結びつきを感じている (feel the warm emotional ties uniting him to the rest of his society)」のであり、また、彼らは仲間からの援助を十分期待できるがゆえに、「相互の愛情は確固たるもの」となっている。彼らは「友好的な世界の中で生を受け」、「自分の居場所」があり、後に生まれてくる子供たちにも同様の社会を継承させようとしており、このような温かな世界の中で安心感に満ちているがゆえに、それが態度として現出するのである。

(8) 《社会的統制 (Social Control)》<sup>25)</sup>—この部族では、非難されるべき事について、すでにみた「皮肉と苦笑 (criticism and mild ridicule)」を通じて行われている。また、部族内のある人が盗みをしたとしても、その行状を改める可能性は十分あるものと考えられている。これまで大酒飲みなど愚かなこと行ってきた人も、いまでは尊敬されている場合も少なくない。また、優秀でなくとも、貧乏であっても、それゆえの屈辱を受けることもない。そこで、Maslow は、「ここでの社会的統制の基本的パターンは、統制の有効性が恥への感受性 (a sensitivity to shame) に依存するような、皮肉と控え目な嘲笑に基づいているようである。罪悪感 は社会的統制の一要因ではない。これらの要点と、犯罪人が当該社会の善き雰囲気 (the good opinion of the society) のなかで更生し得るという事実は、北方 Blackfoot 族のもつ安定感パーソナリティ (the secure personality) ——対人関係を支配している温かくも現実的な親近さ (a warm but realistic friendliness) と諸個人の安全を脅かさないほどの差異や相違に対しての實際上完全なまでの寛容さ (a practically complete tolerance) ——を反映している」と記している。

(9) 《異民族との関係 (Inter-Racial Relations)》<sup>26)</sup>—人種的な偏見は身体的な差異によることが多いが、北方 Blackfoot 族では白人や中国人との混血者がいても無関心である。しかしながら、近隣のサルシー族、ストーニー族、アシニボイン族などの他部族に対しては強い偏見を有している。それらの部族は大馬鹿者で、彼らの文化は北方 Blackfoot 族の全くのモノマネ、しかも粗悪な仕方 で模倣しているという。狩猟民族として有名なストーニー族は、白人から貧素なインディアンの代表的な存在とみなされているために、Blackfoot 族の人々は恥ずかしい思いをしているというが、他の部族と比べて偏見をもつことは少ない。

(10) 《北方 Blackfoot 族のパーソナリティ (The Northern Blackfoot Personality)》<sup>27)</sup>—彼らの間で見られる典型的なパーソナリティは、「名誉と親近性が重んじられ、不安定さ・疑念・妬み・嫉妬・敵対心および敵意や不安などは殆ど見られず」、大多数の人々は「良き自尊心と自己確信 (good self-esteem and self-confidence)」に満ちている。もちろん、これとは逆の「補償適応 ("compensatory")」や低い不安定性を示す人は全体の 5～10%は存在する。しかしながら、少数の彼らを観察すると、「その不安定さは、平均的なアメリカ市民の間に見られるのと同じ程度」であることが分かる。

さらなるパーソナリティ特徴としては、「正直かつ誠実 (honest and sincere)」であること、また彼らは自分の行いについて礼儀正しいというよりもむしろ「率直 (straight-forward)」であって、社会的な謙譲 (social concessions) を示すことはない。他の人に遠慮して、自分を抑えるという一般

24) Northern Blackfoot, pp.21-22.

25) Northern Blackfoot, pp.22-25.

26) Northern Blackfoot, pp.28-30.

27) Northern Blackfoot, pp.35-37.



的な習慣はない。例えば、他人に席を譲ることもなく、断りなしに自ら煙草に火をつける。何かを食べる時でも、遠慮して最初に手をつけないということもない。衣類についても、彼は自分の好む服を着て、派手なものでもお構いなしである。とはいえ、これらのことは彼らが粗野であることを意味しない。ただ単に率直で素朴なだけである。彼らは、常に自分自身を中心に考え (the individual's center of reference is himself)、意のままに行動し、自身の知恵を信頼する。しかしながら、同時に、他者に敵意を抱かずに友好的な態度を示す。また、彼らは、ゲーム、スポーツ、集会、唄や踊りが大好きで、ユーモア、ジョーク、笑顔に溢れた日常生活を送り、権力に対して無関心である。このように、北方 Blackfoot 族は、安定症候群 (the security syndrome) と高い自尊心 (high or adequate self-esteem) という特徴を有する。

(11) 《通文化的なアプローチ (The Cross Cultural Approach)》<sup>28)</sup>—Maslow は、自ら考案したパーソナリティ検定法が、Blackfoot 族にはあまり役立たないことを認識する。支配感や自尊心のテストにおける質問の多くは、Blackfoot 族の人々にとって理解不能で滑稽なものでしかなかった。しかし、安心感のテストは通文化的な比較を行うのに非常に有用であった。というのも、アメリカ社会での不安定な人々と同一の一般的特徴 (the same general characteristics of insecurity) ——権力欲、階級意識、周囲の人間からどう見られているかの不安感、他者への対抗感と敵意、一定の自己防衛など——が、Blackfoot 族の中に少数ながら存在している不安定な人々にも観察されたからである。

(12) 《文化の相対性 (Cultural Relativity)》<sup>29)</sup>—Blackfoot 族での野外調査を行う前の Maslow は、文化相対主義の極端な考え方 (extreme concept of cultural relativity) に一定程度寛容であった。すなわち、1938年夏以前の Maslow は、「生まれたばかりの人間は本質的に完全に無定形である (human beings at birth are essentially completely amorphous)」ゆえに、人のパーソナリティは自らの生活する文化環境によって形成されるとの考えをもっていた。しかし、Maslow は、Blackfoot 族のような全く異なる文化と接触したことで、この考え方を捨てることになる。すなわち、彼は、「人間は生まれ育った集団によってあらゆる側面が形成される粘土かパテの塊にすぎないなどとは、もはや思わない (It is now felt that human being are no mere lumps of clay or putty to be shaped in any conceivable fashion by the group into which they are born.)」と述べる。

とはいえ、彼は、異なる文化がそれぞれに一定の異なったパーソナリティを生み出すことについて完全な否定はしない。彼が棄却したのは「極端」な文化相対主義でしかない。換言すれば、文化相対主義を一定程度肯定しつつも、異なった文化間に共通する普遍的なパーソナリティ症候群のあることを強く認識したのである。そこで、彼は、「Blackfoot 族は他の民族と共通する人間一般の特徴 (the same species characteristics as other people) および同一の基本的な衝動や願望 (the same fundamental urges and desires) を有している。彼らは殆どまたは全ての人間と同じように、自尊心や安心感を求めている (They seek self-esteem and security as do most or all human beings.)。文化の影響が明らかになるのは、個人に何らかの衝動を与えるというよりも、むしろ衝動を充足させる手段として、何が可能で何が不可能なのかを教えるところにある」と報告草稿を結んでいる。

上でみた1945年草稿には、1938年草稿と同じく Maslow 自身のパーソナリティ研究の視角が明瞭に示されている。彼はこの Blackfoot 調査からの知見と洞察から、文化人類学者 Ruth Benedict の文化相対主義を超え、そしてパーソナリティ特徴の人類普遍的傾向の認識について、それを5つの「基本

28) Northern Blackfoot, pp.37-39.

29) Northern Blackfoot, p.39.

的欲求」として、論文 Maslow (1943b) で提示した。

と同時に、1945年草稿では、調査直後の1938年草稿では詳しく述べられていなかった Blackfoot 族特有の社会文化的な様相が扱われていて、そこには後年重視されるもう1つの概念である「シナジー」の原型が見出されることに注意したい。その社会文化的な様相を要約すれば、次のようである。

- (イ) 経済的に自立した Blackfoot 族内の人々は、血縁の有無を問わず、互いに家族的な関係にある。すなわち、自己と他者とが自発的に一体化しているという関係（利己と利他の合一）が一般的であること。
- (ロ) 部族の将来を担う子供たちには自由に欲求を充足させると共に、小集団の所属と活動を通じて相互に温かな信頼関係が醸成されていること。
- (ハ) 部族内の対人関係の統制と円滑化は、皮肉や苦笑ならびにジョークやユーモアによって媒介されていること。
- (ニ) 部族の一般的パーソナリティとして、高い程度の自尊心、自己確信、安心感、安定感、率直さ、誠実さ、友好性、寛容性、嫉妬や敵意のないこと等が顕著であること。
- (ホ) 部族の長となる者は、貧しい者への富の分配など、部族の社会的ウエルフェアの向上に資する自己犠牲や責務を負い、権力よりも名声を重視していること。

このような Blackfoot 族のもつパーソナリティの特徴点を簡潔に抽出すれば、「経済的自立」、「安心・安定感」、「集団所属・相互信頼関係」、「自尊心」、「名声欲」、および「自他合一」となる。このうち「自他合一」を除く特徴点は、論文 Maslow (1943b) で示された「生理的欲求 (the 'physiological' needs)」、「保全欲求 (the safety needs)」、「愛の欲求 (the love needs)」、「自尊欲求 (the esteem needs)」に対応するものであることに留意したい。もっとも、基本的欲求の階層性に関するアイデアについては、Blackfoot 調査からは導出できない。

また、同じ1943年論文で提示された「自己実現の欲求 (the need for self-actualization)」は、周知のように Kurt Goldstein (1878-1965) の用語法からのほぼ直接的な援用であったが、1950年以降に再定義される Maslow の自己実現概念の中には、三島・河野 (2009) で明らかにされているように、「自他合一」というシナジー概念が要素として内包される。そして、晩年の1969年論文「Z 理論」(Maslow, 1969: 39) の中で、Blackfoot 調査での経験をふまえ、「自己実現人はシナジーへ向かう自然的傾向を強化する。…簡潔に言えば、シナジーは、利己主義と非利己主義の二分法を超越 (synergy transcends the dichotomy between selfishness and unselfishness) し、双方を単一の上位概念のもとに包摂する。それは競争関係や競技におけるゼロサムや勝ち負けを超越する」と述べ、自己実現とシナジーは等質的な概念であることが示唆されている。

なお、Maslow にとって若き日の Blackfoot 調査はよほど印象深かったのであろう。心臓障害で逝去する約5ヵ月前の日記 (1970年1月17日) に、「シナジーの具体例：…Blackfoot の富 = どれだけ他人に与えるかである (Examples of synergy: …Blackfoot wealth = how much you give away.)」(Maslow, 1979: 1222) と、メモを残すほどである。

## 4 おわりに

これまでみてきたように、Maslow は、1937年コロンビア大学特別研究員からブルックリン大学へ

移り、人間パーソナリティに関する研究を開始した。コロンビア大学における交遊の文化人類学者 Ruth Benedict の勧めにより、1938年夏カナダ・アルバータ地方の Northern Blackfoot 族の野外調査を行うが、そこで得られた知見は彼の学説形成上、重要な地位を占めるものであった。

彼は、Benedict の影響下で文化相対主義を信奉していたが、当該調査の後には、むしろパーソナリティの人類普遍性へと研究関心を傾斜させた。それ以降、Maslow 学説はその方向で展開されて、その1つの所産と言うべきものが1943年論文「人間動機の理論」で提示された人間一般に共通する「基本的欲求」概念の提示であった。

その後、彼は、基本的欲求の最高次に位置する「自己実現」欲求の探索へと向かうことになる。すなわち、Maslow (1943a, 1943b) における萌芽的概念 (Goldstein からの援用) にとどまることなく、彼独自の GHB 調査 (1945-49年) が行われ、その結果、1950年論文「自己実現人：心理学的健康の研究」で、自己実現人特有のパーソナリティ特徴として、「自発性・創造性」、「課題中心性」、「神秘体験」、および「自他共存性」などが挙げられた。

更に、Maslow は、そうした研究に基づき、自己実現概念の再定義を行い、自己実現の欲求とは「B 価値 (= 存在の本質的価値)」の追求にあると主張するに至る。1967年論文「メタ動機の理論」(Maslow, 1967: 108-109) では、B 価値固有の諸相として、①真、②善、③美、④統合性／全体性、⑤活気性／発展性、⑥独自性、⑦完全性、⑦a 必然性、⑧完成、⑨正義、⑨a 秩序正しさ、⑩単純さ、⑪豊かさ／十全さ／包括性、⑫無為性、⑬快活さ、⑭自足性、⑮有意味性、などが指摘され、そこには自他合一という「シナジー」概念が投影されている (河野、2009; 河野、2010)。

なお、Maslow の妻 Bertha によって Maslow 学説の数少ない理解者の1人とされる Henry Geiger が、1971年の遺作: *The Father Reaches of Human Nature* の追悼序文に、「後年の彼は、良き社会 (a better world) へ向かう道を示す社会心理学の基礎は一体何なのかを常に熟考し、その思索の礎石は Ruth Benedict のシナジー的社会 (a synergistic society) という概念にあった」(Maslow, 1971: xx-xxi) と記しているように、実は、社会科学上のシナジー概念は、Blackfoot 調査の前に Benedict が Maslow に提示していたとの証言がある (Harris, 1970: 52)。それゆえ、Benedict のシナジー概念とはいかなるもので、Maslow はそれをいかに摂取したのか (Maslow, 1964; Maslow and Honigmann, 1970)、さらにはシナジー概念の企業経営への实际的適用について Maslow はいかに考えたのか (Maslow, 1965)、に関する考察が必要とされようが、そのことについては別稿に譲りたい。

## ●参考文献

- [1] Benedict, R. (1934) *Patterns of Culture*, M. A.: Houghton Mifflin. [米山俊直訳 (2008) 『文化の型』講談社]
- [2] Harris, T. G. (1970) "About Ruth Benedict and Her Lost Manuscript," *Psychology Today*, 4, 51-52.
- [3] Henle, M. (ed.) (1961) *Documents of Gestalt Psychology*, C. A.: University of California Press.
- [4] Hoffman, E. (1988) *The Right To Be Human: A Biography of Abraham Maslow*, N. Y.: St. Martin's Press Inc. [上田吉一訳 (1995) 『真実の人間：アブラハム・マスローの生涯』誠信書房]
- [5] 河野昭三 (2009) 「社会・企業・個人の三位一体化に関する一考察」『中華日本研究』中華大學人文社會學院, 第1期, 3-25頁.
- [6] ——— (2010) 「社会・企業(組織)・個人の統合に向けて：マズロー Z 理論の意義」甲南大学経営学会編『経営学の伝統と革新』千倉書房, 71-85頁.
- [7] Lowry, R. J. (1979) *The Journals of A. H. Maslow, Volume II*, C. A.: Brooks/Cole Publishing Company.
- [8] Maslow, A. H. (1937) "Personality and Patterns of Culture," In Stagner, R. *Psychology of Personality*. N. Y.: McGraw-Hill, 408-428.
- [9] ——— (ca. 1938) "The Psychology of Northern Blackfoot Indians" (Mimeo, In the University of Ak-

ron Library)

- [10] ——— (1940) “A Test for Dominance-feeling (Self-esteem) in College Women,” *Journal of Social Psychology*, 12, 256-270.
- [11] ——— (1942) “Self-esteem (Dominance-feeling) and Sexuality in Women,” *Journal of Social Psychology*, 16, 259-294.
- [12] ——— (1943a) “Preface to Motivation Theory,” *Psychosomatic Medicine*, 5, 85-92.
- [13] ——— (1943b) “A Theory of Human Motivation,” *Psychological Review*, 50, 370-396.
- [14] ——— (1943c) “Dynamics of Personality Organization I · II,” *The Psychological Review*, 50, 514-539, 541-558.
- [15] ——— (1950) “Self-Actualizing People : A Study of Psychological Health,” *Personality Symposia : Symposium#1 on Values*, N. Y. : Grune & Stratton, 11-34.
- [16] ——— (1954) *Motivation and Personality*. N. Y. : Harper & Brothers. [小口忠彦監訳 (1971) 『人間性の心理学』 産業能率短期大学出版部]
- [17] ——— (1964) “Synergy in the Society and in the Individual,” *Journal of Individual Psychology*, 20, 161-172.
- [18] ——— (1965) *Eupsychian Management : A Journal*. Homewood, Ill. : Irwin-Dorsey. [原年廣訳 (1967) 『自己実現の経営』 産業能率短期大学出版部]
- [19] ——— (1967) “A Theory of Metamotivation : The Biological Rooting of the Value-Life,” *Journal of Humanistic Psychology*, 7, No. 2, 93-127.
- [20] ——— (1969) “Theory Z,” *Journal of Transpersonal Psychology*, 1, No. 2, 31-47.
- [21] ——— (1970) *Motivation and Personality (Second Edition)*, N. Y. : Harper & Row, Publishers, Inc. [小口忠彦訳 (1987) 『[改訂新版] 人間性の心理学』 産能大学出版部]
- [22] ——— (1971) *The Farther Reaches of Human Nature*, N. Y. : Viking Press. [上田吉一訳 (1973) 『人間性の最高価値』 誠信書房]
- [23] ——— (1998) *Maslow on Management*, N. J. : John Wiley & Sons, Inc. [金井壽宏監訳 (2001) 『完全なる経営』 日本経済新聞社]
- [24] ———and Honigsmann, J. J. (ca. 1945) “Northern Blackfoot Culture and Personality” (Mimeo, In the University of Akron Library)
- [25] ——— (1970) “Synergy : Some Notes of Ruth Benedict,” *American Anthropologist*, 72, No. 2, 320-333.
- [26] 三島斉紀 (2005) 「A. H. Maslow の欲求論に関する一考察：正常パーソナリティと基本的欲求5分類」『研究年報・経済学』東北大学経済学会, 第66巻第4号, 209-215頁
- [27] ———・河野昭三 (2005) 「マズロー理論の基本的特質に関する一考察：マレー理論との比較において」『研究年報・経済学』東北大学経済学会, 第66巻第3号, 167-179頁.
- [28] ——— (2006) 「ゴールドシュタインの「自己実現」概念に関する覚書」『研究年報・経済学』東北大学経済学会, 第67巻第4号, 147-161頁.
- [29] ——— (2009) 「A. H. Maslow による「自己実現」概念の探求プロセス：GHB ノートと1950年論文を中心に」『経済貿易研究』神奈川大学経済貿易研究所, 第35巻, 47-66頁.
- [30] ——— (2010) 「パーソナリティ研究におけるマズローの基本視座」『商経論集』神奈川大学経済学会, 第45巻第2・3合併号, 35-48頁.

〔謝辞〕 本稿の作成に際し、甲南大学経営学部河野昭三教授からは多くの有益なコメントを頂戴し、また九州国際大学経済学部の村田晋也助教からは資料収集の協力を得た。ここに記して謝意の一端を表したい。